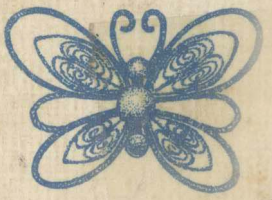
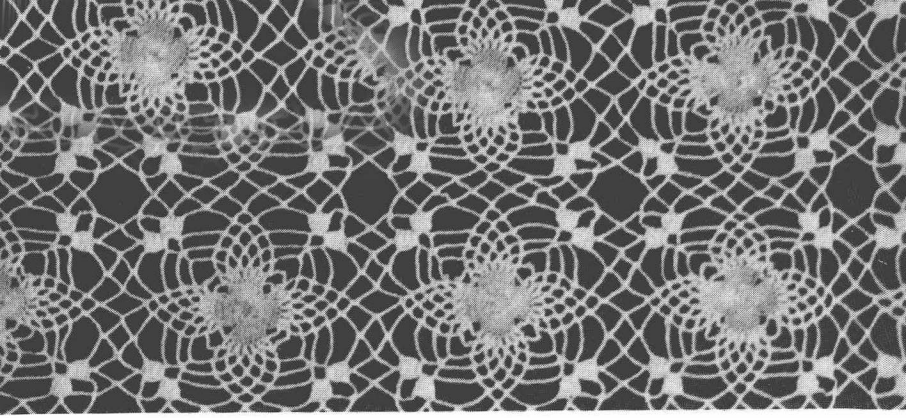
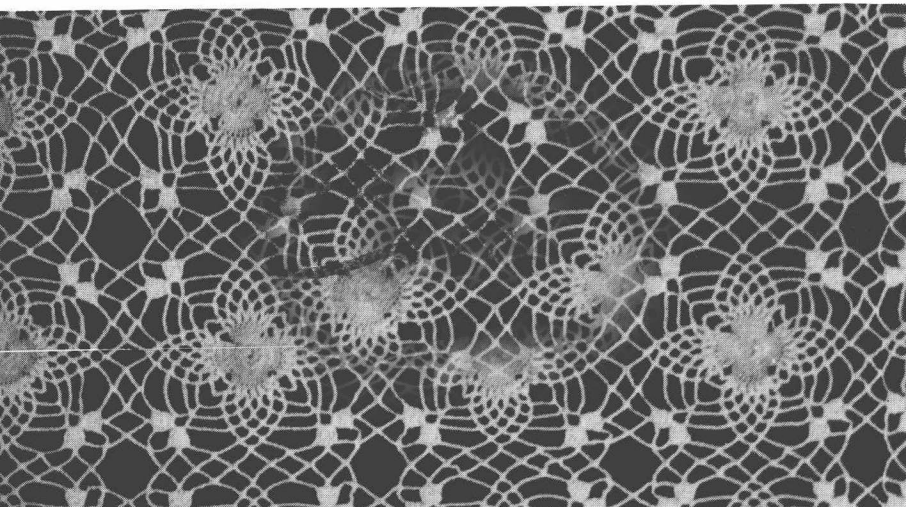




津村節子

# ガラスの階段

文藝春秋



**津村節子**（つむら　せつこ）

昭和3年、福井市に生まる。学習院短期大学国文科卒。在学中より小説を発表し、40年「玩具」で第53回芥川賞を受賞。

主な著書

「海鳴」講談社
「石の蝶」新潮社
「さい果て」筑摩書房
「葬女」筑摩書房
「炎の舞い」新潮社
「娼婦たちの暦」講談社


ガラスの階段

昭和五十三年四月二十五日　第一刷

定価　八五〇円

著者　津村節子
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三
印刷　大日本印刷
製本　加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします



© Setsuko Tsumura 1978　Printed in Japan

# ガラスの階段

裝幀　北澤知己

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# I

志津子は、通いのお針子二人が帰ったあと、シャッターをおろし、ガラス戸の鍵をしめ、レースのカーテンを引いた。今夜は徹夜をせねばならない。クリスマスのデイトに着たいという客のドレスを、明日の朝までに仕上げねばならないのだ。

「すみません。今夜も徹夜致しますので」

志津子は、店の奥に住む家主に挨拶に行った。家主は五十歳になる未亡人で、辰子という。

「あら、今夜も？　忙しいシーズンでしょうけれど、無理をすると軀(からだ)をこわしますよ。何ごとも健康第一ですからね」

「はあ。今夜で、ちょっと一息つきますから」

「だって、まだあと、お正月がひかえているでしょ？　大変な商売ねえ」

夫が死んでも住む家があり、経営していた洋品店の店先を志津子に貸した家賃がはいり、二人の息子からもそれぞれ仕送りのある辰子は、三十歳になるのに結婚もせず、ささやかな洋裁店を必死に支えている志津子に、憐憫の色を見せて言った。洋品店なら、夫の死後も何とか女手でやってやれぬことはあるまい、と志津子は思うのだが、求めて苦労しなくても、食べるのに困らぬなら、気楽にその日その日を送ったほうがよい、と辰子は考えているようだ。

志津子は、店の脇の出入口から外に出た。ここは東京近郊のベッドタウンとして開けた町で、志津子の店は駅前の繁華街から少しはずれているが、近くにすし屋やそば屋、喫茶店などがあり、駅の近くまで足をのばせば、レストランもある。一人暮しの志津子は、朝食だけアパートで自炊し、昼はパンを買ったり、出前を頼んだりしているが、夜は外へ食べに行く。根を詰める洋裁の仕事は、肉体的な疲労も多いが、女客相手で神経も使うので、一日が終わると一時に疲れが出て、食事の支度をする気力もなくなるのだ。

今夜は徹夜をせねばならないので、アルコールぬきの夕食である。飲むと言っても、日本酒なら二本ぐらい、レストランでは二分の一サイズのワイン一本だが、女がひとりで飲んでいる姿は憐れっぽく見えぬか、と周囲の眼が気になって酔えない。飲んでも楽しくないが、飲まなければ一層味気なく、志津子はただ空腹を満たすだけの食事を終わって店に戻った。

明日までに仕上げねばならないドレスの主は、婚約者と横浜の海の見えるホテルで食事をし、そのあとダンスをしに行くのだと言っていた。彼女は開店間もなくからの客で、旅行社に勤務している。志津子と同年で、このままでは益々婚期を逸しそうだ、と焦っていたが、今年の夏、思い切ってたまっていた休暇を一度に取り、ヨーロッパ行きのツアーに加わって、同行のメンバーの年下の男性に近づき、婚約にまで漕ぎつけた、と得意になって報告に来た。

「旅って、人恋しくなるでしょう？　特に日本語の通じない外国へ行くと、日本人が懐かしいし、団体で行動していると親密になる機会も多いのよね。そこをねらったのよ。日本だったらただのお友達で終わるような場合でも、感傷的になっているからつい恋人みたいな気分になるし――」

そして志津子にも、海外旅行をしきりにすすめるのだった。

「それはいい思いつきでしたわね。でも誰もがそんなにうまくいくとは限りませんわ。やっぱり篠原さんが魅力的だったからですよ。それに、行きたくても私はこの通り貧乏暇なしですから――」

志津子は心にもないお世辞を言いながら、これでウェディングドレスと色直しのドレス、それに、新婚旅行用の服の注文もとれる、と胸算用していた。彼女を羨むよりも、商売が先に立つ。

三十にもなって恋人もなく、クリスマスイヴに徹夜して同性の服を縫うことに、わびしさを感じないと言えば嘘になる。が、今が一年で一番の稼ぎどきなのだ。美容師が、私たちは人が遊ぶときに忙しい因果な商売です、と言っていたが、それは自分の仕事も同じだ、と志津子は思う。クリスマスが終わっても、すぐ正月が来る。正月の晴着を大晦日までに仕上げなければならない。三が日は店を閉めるが、五日に着たい、七日に着たい、という服が、大晦日までに出来上がらなければ、店は閉めていてもアパートで縫わねばならないのだ。

袖つけのミシンをかけているとき、電話が鳴った。

今時分、誰だろう——。

志津子はいぶかしく思いながら受話器を取った。

「室町さん？　ぼくですよ」

そう言われても、志津子は誰も思い当らなかった。

「田代、わかりませんか？　この間ふるさとで——」

〝ふるさと〟というのは、秋田の郷土料理を食べさせる店である。

「ああ、あのときの」

志津子は、カウンターの隣に坐っていた若いサラリーマン風の男を思い出した。顔ははっきり覚えていないが、わずかに地方訛のある言葉に記憶があった。

「よかった。思い出してくれて」
少し酔っているような声である。
「どうして電話番号がおわかりになったんです?」
「ふるさとの女の子に、ボンって洋裁店やっている人だって聞いて、電話帳で調べたんですよ。いま何しているんですか」
「仕事です」
「夜も仕事をするんですか?」
「明日までに納めなくてはならないものですから」
「大変だなァ。あれから時々ふるさとへ来ているんですが、お会いしませんね」
「いま、ふるさとにいらっしゃるんですか」
「今夜あたり見えるかもしれない、っていうんで、ずっと待っていたんですが」
志津子は返答に困って、まあ、と笑った。
「ちょっと息ぬきに出ていらっしゃいませんか」
「いいえ、今夜は仕事が」
「残念だな。クリスマスイヴですよ」
「仕方がありませんわ」

「じゃあ、明日の晩、食事でもいかがです」
「今夜徹夜ですから、明日の晩は早く休むつもりですの」
「ふられたかな」
「え？　何ておっしゃいました？」
「いいえ、じゃまた」
「では失礼します」
「あまり無理をしないで下さいよ」
志津子は受話器を置いた。無理をしないでくれという言葉が妙に身にしみて、今夜はどうかしている、と思った。女客相手の商売で、男に接する機会は殆どない。クリスマスイヴに、男から電話がかかって来るなど、ずいぶん久しいことだった。一度飲み屋で会っただけの男の誘いを、軽々しく受ける気はなかったが、それでも男っ気のまるでないイヴではなかった、と志津子は苦笑した。たとい声だけでも、わびしい夜のわずかなぐさめになった。

田代に会ったのは、十日ほど前の夜、仕事が一段落したので近所の飲食店を通り過して、駅前の繁華街の路地をはいったところにある小ぢんまりした秋田料理の店へ行った夜のことである。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

時間的にも、経済的にも、旅をする余裕のない志津子は、秋田料理などというものをその店で初めて食べた。故郷と呼ぶべきものを持たない志津子は、その店の主人と妻の秋田訛をなんとなく懐かしい思いで聞きながら、きりたんぽやしょっつる鍋をつついていると、気持が安まるのだ。家庭に縁の薄い志津子は、鍋料理もこういう店へでも来なければ食べることはない。一人前でも、小さな鍋で食べさせてくれるのが有難かった。

その夜は特に冷込みが強く、あたたかい鍋料理がむしょうに食べたかった。小型のガスコンロの上にのせた大きな帆立貝の殻の中で煮えはじめたしょっつるの匂いが、はらわたに浸みるようだった。

熱燗の酒を少しずつ口に運びながらしょっつる鍋を食べていると、白木のカウンター席の隣に、やはり連れのない男が坐った。男はまず酒を注文してから、しばらく志津子の前の鍋を見ているようだったが、

「それ、しょっつるですか」

とたずねた。

「ええ、そうです」

「真似していいですか?」

「あら、ええ、どうぞ」

志津子は、男の子供っぽい口調に、笑いを誘われた。
男の前に、志津子と同じものが運ばれて来た。
「ここへは、よくいらっしゃるんですか」
「近いものですから、たまに――」
「ぼくは引越して来たばかりで、目下、この界隈の飲み屋を開拓中なんです」
そんなことがきっかけで、一時間あまり男とぽつりぽつり話しながら酒を飲んだ。男はアパートに帰っても誰もいないので、つい途中でひっかかることが多い、と言っていたが、かなり酒も強いようだった。年は二十七、八ぐらいに見え、自分より若いらしいということで志津子も気を許して、初対面なのについ相手になっていた。
別れ際に、同じ町の住人になったのだから、またお会いすることもあるでしょう、と田代は言った。だが、わざわざ店へ電話をしてくるとは、思ってもいなかった。明らかに年上の女に、なぜ興味を持ったのかわからない。
いや、興味など持ったわけではあるまい。たまたま〝ふるさと〟で志津子のことを思い出し、酔いに乗じて面白半分にかけて来たのだろう。男から誘われたからと言って、気持が浮き立つような年ではもうないことが、志津子は淋しかった。
ミッチーブームで暮れた昭和三十三年のクリスマスイヴに、好ましく思っている男からパ

ーティーに誘われたことがある。その頃志津子は十九歳で洋裁学校に通っていたが、同じクラスの友達から従兄だと紹介された男だった。

洋裁学校と言うと聞こえはいいが、午前と午後と夜間の三部授業になっていて、要するに同じ施設を最大限に活用しているのだった。そこを卒業したからと言って世間に通用するような資格はとれない。授業時間が短いのが家庭の主婦たちや、勤め帰りの女性に適していて、結構繁昌している様子だが、無論、洋裁で身を立てようという者は来ていない。せいぜい自分のブラウスやスカートが縫えれば、という程度の目的で来ている者が多かった。

志津子は、名の通った学校へ行きたかったのだが、母の許を飛び出して自活せねばならなかったので、喫茶店の二階に住み込んで午前中は学校に通い、午後から夜にかけて店で働いていた。クリスマスイヴに誘われたとき、自分にも人並みな青春が来た、と胸がときめいたが、店が一番忙しい時で、休むことは許されなかった。

その夜かれは他の女友達を誘い、それがきっかけで親密さを増して結婚したという。志津子が誘いに応じなかったというよりも、喫茶店に住込みで働いているという事情を知って、男の気持が遠のいたのかもしれない。

店の客たちからも、志津子は屢々誘われることがあった。学生やサラリーマン対象の店なので、定休日は日曜日があてられていたが、誘われても午前中は一週間分の洗濯、午後はデ

ザインスクール、夜は洋裁学校の宿題を間に合わせるのにせいいっぱいで、わずかな余裕もなかった。

他の生徒たちのように、ブラウスやスカートが縫えればいいというわけにはいかない。志津子は洋裁で身を立てるつもりであった。そのため、遊びも、デイトもあきらめていた。資格がとれなくても、実力をつければよいだろう。それには、人の二倍でも三倍でも努力せねばならない、と覚悟していた。

家主の辰子には、志津子をよくよく縁遠い女といささか蔑んでいる様子が見える。

「洋裁屋さんなんて、女相手の仕事じゃ、男性が見つからないのはあたりまえですよ。どこかお勤めしたほうがいいんじゃないんですか」

「勤めると言っても、この年ではどこもありませんわ。それに、結婚するより、自分一人のほうが気楽ですし」

「気楽だなんて、ずいぶん気苦労が多そうじゃありませんか。何によらず商売というのは大変なことよ。女はやっぱり結婚して、御主人や子供の世話をしているのが一番倖せじゃないかしら」

志津子は、辰子のお節介がわずらわしかった。夫の遺したものと子供の仕送りで、何もせずにのんびり暮している彼女は、結婚しないであくせく働いている女が愚かしく思えてなら

ないのだろう。
辰子から見合写真を、二、三度見せられたこともある。が、志津子は丁重に断わった。自分の意思で結婚しないのだということを示しておかねば、今後もうるさく干渉するだろう。結婚したい気はあるのに、これまで男から顧られなかったと思われるのも口惜しい。
「私、都心に自分の店を持つのが夢なんです。結婚よりも、仕事が好きだという女もいたっていいでしょう」
「仕事が好きなのは結構よ。でもそれなら、結婚しても仕事を続ければいいじゃないの」
「私は、そんなに能力はありませんわ。仕事だけでせいいっぱいなんです」
しかし辰子は、縁遠い女の負け惜しみととったかもしれない。

大晦日に納めるものは納め、漸く店をしまってアパートへ帰った志津子は、倒れるようにベッドにもぐり込み、元旦は昼近くまで眠っていた。
さすがに空腹になり、買っておいた切餅を焼いて、海苔を巻いて食べた。一人きりなのに、正月らしく雑煮を作ったり、おせちを食べたりするのもなんだか空しい気がして、ここ何年かは何もしない。店で働いていれば、家族のいない淋しさなど感じることもないが、正月の三が日は、所在なくてやりきれない。

テレビをつけてみても、みな同じような正月番組である。外へ出かけても休んでいる店が多くて、時間を潰しようがない。昼から酒を飲みはじめ、ひどく酔ってそのまま寝たらしく、目が覚めたのは翌朝だった。われながらよく眠ると思ったが、一年間の疲れが一時に出たのだろう。

四日に取りに来る仕事が残っていて、二日と三日はミシンを踏んだ。こんなつまらない正月を過ごしている者もいないのではないだろうか。来年は、早くから温泉地の宿でも予約しておいて、三が日はこのアパートから脱出することを考えよう、と志津子は思った。

四日に店の戸を開けると、年賀状が差し入れられていた。

謹賀新年、と印刷してある平凡なはがきに、今年もどうぞよろしく、とペンで書き添えてある。見馴れぬ文字だと思ったら、田代雅之と署名してあった。店の名を〝ふるさと〟で聞いて、電話帳で番号を調べた、と言っていたが、住所も控えておいたのだろう。

アパートにいても所在ないので四日から店を開けたが、若いお針子たちは気の毒なので、五日まで休みにしてある。アパートにもミシンを置いてあるので、仕事が出来ぬわけではないが、やはり店へ出ると気の張りも違って、仕事がはかどるようだ。それでも、まだ松の内なので早目に切り上げることにして、志津子は四時頃ワンピースを取りに来た客が帰ると、店を片づけはじめた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.